

多文化共生教育コンソーシアム～4 大学連携授業

2021 年度、宇都宮大学履修学生の声：

この授業を履修して、4 大学それぞれの教授が専門とする「グローバル」「多様性」「多文化共生」を知り、そしてそれらはさまざまな分野から多角的に見ることができるのだと気付いた。また 4 大学の学生との交流授業では、その土地に関する事柄を研究している学生もいれば自分の周りにはいないが、他の大学には自分と同じ分野の研究をしている学生がいたりなど、情報共有をすることで毎回刺激を得られていた。

こういった経験を通して、私は学知が増え、自身の成長につながったと感じているので、ぜひこれからもこういった授業が増えれば良いと思う。(国際学部 3 年 下村 由紀那)

まず、私がこの講義を受けて感じたことは、「オンラインだからこそ実現できた講義」だったということです。他大学との協働の授業というのは、対面での講義では、物理的に不可能ですが、それがオンラインという環境下において可能になりました。オンラインという新たな環境を活かした画期的な講義だったと考えています。また、他大学の先生の講義を受けることができたことと、他大学の生徒とコミュニケーションを取れたことは自分の中での財産となったと感じています。毎週、各大学の様々な先生方が、毎回違った角度で「多文化共生」についての講義をしてくださるので、自分にとってとても刺激的なものとなりました。また、普段関わることのないような学生との交流により、自分の視野や価値観、考え方というのが、さらにアップデートされたと実感しています。

他大学の協働授業というのは、とても珍しく、あまり無い、とても価値ある機会です。ぜひ、皆さんにもこの機会を積極的に有効活用して、自分の意見や考え、価値観をさらに深めていってほしいと考えています。(国際学部 2 年 長谷川 陽一)

第 1 回交流型授業のリアクションペーパーより

この授業内容の情報共有だけでなく、「大学生活」の情報共有もできたので非常に有意義な時間だった。ぜひ今後も他大との合同授業があると良い刺激を受けるので、機会を設けてほしい。(国際学部 3 年 下村 由紀那)

他大学の学生と交流する機会がほとんどなかったもので、それぞれの大学の学部の構成や勉強している内容について知ることができ、楽しかった。授業の中で印象に残っていることで、多くの人が夜間中学について触れていて、夜間中学のスタッフをしていたので、興味を持ってくれたことはうれしかった。また、自分では気づけなかったポイントに改めて気づくことができた。(国際学部 2 年 田村望)

今回の講義では、様々な生徒と発表を通してお互いに意見交流をすることができ、この講義の目的や学ぶ意義について再確認することができました。私は他の大学がどんな特徴があり、学生がどのような学生生活を送っているのかなど全く知りませんでした。そのため各学生の自己紹介などから学校の特色や今頑張っていることなどが知れて、とても刺激を受けることができました。また、受講した目

的や印象に残ったものは個人で様々でしたが、「外国にルーツのある児童へ教育に興味を持っている」や「外国と日本の教育制度の比較をしたい」、「夜間中学について印象的だった」、「健康の定義を自分でも考え直してみた」などの声が挙げられました。このような意見から、さらにその特にどの部分を深掘りしていきたいのかを話し合い、今取り組んでいる学習と絡めながら意見を交流しました。他大学との関わりがない今、こうしてお互いの思いや考えをぶつけ合うことはとても斬新な思いを受けたところです。
(国際学部2年 長谷川 陽一)

このような他大学との合同授業は、自身あるいは大学を見つめ直す機会を与えてくれた。(国際学部2年)

第2回交流型授業のリアクションペーパーより

企画を考え、発表することで他の人の興味関心、印象に残った授業の内容を読み取ることができ、どの人の企画もとても興味深く聞くことができた。…この授業はすべてオンラインで、4つの大学が合同で授業をしてきたわけだが、なかなか他大の授業を受ける機会はなく、コロナ禍で他大生と交流する機会も少ない中での開校だったので、とても楽しく、意欲的に学習できたと思う。また、様々な視点から多文化共生についてみることで、新たな視点や多文化共生のためのアプローチを得た。この授業で学んだことを今後の自分の学習に役立てるようにより深く考えていきたい。(国際学部2年 田村 望)

今回の講義では、交流会を通して「多文化共生」に向けての様々な企画について考察を深めました。私のグループでは、子供だけではなく、大人も一緒に学ぶことができる学習機会を確保する案や、ムスリムを例に、外国人児童生徒のルーツや文化を教育に取り入れるという案ができました。私も、学習機会の確保について着目して考えたのですが、その保護者や大人にまで目を向けられていなかったのも、さらに対象者を広げていくことの大切さと重要性に気づかされました。また、ムスリムを例にした宗教に関する教育では、教育というよりも、交流というところにより力を入れて、いくのではないかと自分は意見させていただきました。お互いを「知る」というところでは、交流から始めると思います。そのため、民族衣装やゲームなどを通して、交流を通して、無意識的に民族や人種の壁を少しでも取り払っていくことが「相手を理解する」というところに繋がっていくのではないかと考えました。今回は、様々な人々の企画から、自分に無い考えを多く得ることができたので、このような交流授業をぜひ、もっと増やしても面白いのかなと思いました。

(国際学部2年 長谷川 陽一)